

中国人日本語学習者における清濁の混同とその方言差

劉佳琦

liujq@akane.waseda.jp

1. はじめに

中国人日本語学習者は漢字を見て、その単語の意味がある程度理解できるため、語彙や読解などの能力の上達が早い。しかし、日本語の漢字を中国語の「拼音」の読み方で発音する傾向が見られる。特に、日本語の濁音・清音の混同は、知覚や生成ばかりでなく、語彙や文法の習得にも影響を及ぼしている。本研究で日本語の有声・無声破裂音の習得を研究対象にする。

対照研究により、中国語(標準語)と日本語破裂音の音韻体系の差異があり、中国語(標準語)には日本語の有声・無声の対立がないことが分かっている。また、中国語といっても、7つの方言区が存在しており、上海方言のような日本語の有声・無声の音韻対立を有する方言もある。そのため、母方言の影響で、日本語の有声・無声破裂音の習得においては上海方言話者の方が有利ではないかと言われている。

2. 先行研究

第二言語習得において、母語の影響が最も顕著に現れる分野が音声・音韻であると言われていた(戸田 2001)。中国人日本語学習者の場合、有声・無声破裂音の習得が困難であると従来から指摘されている。その原因が両言語の音韻体系の差異であると報告されている(水谷 1974、蔡 1976、杉藤・神田 1987、朱 1994)。また、方言差による日本語の有声・無声破裂音の習得の違いがあり、上海方言話者の方が早く、北方方言話者の方が遅いと指摘している研究もある(福岡 1995、王 1999、山本 1999)。有声・無声の対立を持たない北方方言話者より、その対立を持つ上海方言話者の方が、日本語有声・無声破裂音の知覚・生成の習得が早いことが分かっている。しかし、語中位置や音声環境による習得の差異を考察した研究は少ない。本研究は先行研究を踏まえた上で、語頭、語中(撥音後、促音後、その他)という音声環境における日本語有声・無声破裂音の知覚状況を調査する。また、北方・上海の方言を考慮し、知覚習得の差異を考察する。

3. 知覚実験

3.1 実験内容

本研究は日本語の有声破裂音/b//d//g/と無声破裂音/p//t//k/が、それぞれ語頭、語中(撥音後、促音後、その他)にある場合を設定した。調査語として3拍語の有意味語

86 個を選択した(調査協力者の使用する教科書を参考に、未習語にした)。アクセント型は平板型である。

表1 調査語の一例(/p//b/の場合)

語中位置	語頭		語中				
	無声/p/	有声/b/	無声/p/			有声/b/	
音声環境	—	—	撥音後	促音後	その他	撥音後	その他
調査語	パネル	ばあい	はんぱ	い っ ぱ	—	えん ば	しば ふ

3.2 手順

- 1) 発話録音：日本語母語話者(東京都出身)1名
- 2) 知覚確認：日本語母語話者(首都圏出身)5名
- 3) 知覚調査：中国の大学の日本語学科に在籍している日本語学習者45名(北方20名、上海25名)で、学習歴は3ヶ月である。

所要時間 20 分である。機材は SONY TCM-5000 EV(テープレコーダー)、SONY ECM-MS957(マイクロフォン)である。統計分析は SPSS11.5 を使用した。

3.3 結果と考察

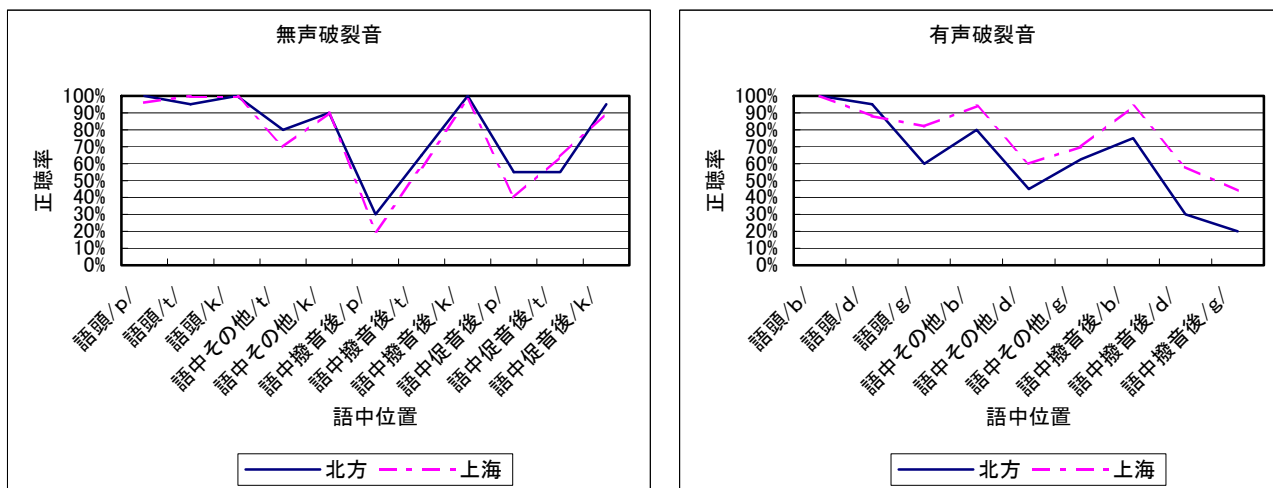


図1 後続母音/a/の場合の正聴率の分析図

3.3.1 語中位置と音声環境における知覚

語中より語頭の方が正聴率が高いことが図1から見られる。語頭の方が知覚しやすく、語中の方が知覚しにくいと考えられる。蔡(1979)によれば、日本語の語中無声破裂音の呼気が弱く、中国語の無気音に近いという。また朱(1994)の音響学的実験でも、日本語の語中の無声破裂音は呼気量が語頭の場合より小さくなる傾向があると述べている。中

国語では有気・無気の区別で意味の違いをもたらすので、中国人学習者は日本語のような有気・無気で意味の弁別を働かない言語に接すると、困惑すると思われる。つまり、中国人日本語学習者にとっては、語中無声破裂音を知覚する際、中国語の無気音として聞き取り、有声破裂音と判断してしまうと考えられる。一方、日本語の無声破裂音が語頭にある場合、中国語の有気音ほど呼気が強くないが、有声破裂音と混同する確率が低く、正聴率が高いのではないか。しかし、無声子音/k/、有声子音/b/の場合は、音声環境を問わず、高い正聴率を示している。

また、無声子音/k/、有声子音/b/を除いて、「語中撥音後」、「語中促音後」の方が、「語中その他」より正聴率が低い。しかし、統計分析の結果では、北方方言話者の場合は有意差が見られたが、上海方言話者の場合は有意差が見られなかった。データ数に関係していると考えられる。

3.3.2 方言差による知覚状況

無声破裂音の場合は、図1から両者の正聴率を表す曲線が類似しているが、多少ずれているように見えるが、統計分析の結果では、その有意差が見られなかった。つまり、北方・上海方言話者の間、日本語の無声破裂音の知覚には差異が見られず、上海方言には有声・無声の対立があるにも関わらず、上海方言話者が無声破裂音を知覚する際、有声破裂音と判断してしまうことが多いということが分かった。おそらく初級段階においては、日本語の語中無声子音と母語(中国語)の無気子音と混同をしているからだろう。

有声破裂音の場合は、語中において北方方言話者より上海方言話者の正聴率が高いことが分かった。統計分析の結果では、 $t(35.539)=4.607$ 、 $P<.000$ 、有意差が見られた。日本語のような有声・無声の対立を持つ上海方言話者にとって、有声破裂音の知覚は容易であるが、その対立を持たない北方方言話者にとっては、日本語の語中有声破裂音、無声破裂音と中国語の無気破裂音とを混同したため、誤聴が多く現れたのであろう。しかし、同じ傾向が語頭には現れなかった。北方方言話者にとって、有声破裂音を新しい音声として知覚する能力があることが推測できる。

4. まとめと今後の課題

語中位置と音声環境による知覚状況に関しては、無声子音/k/と有声子音/b/を除いて、1) 語頭の方が知覚しやすい、2) 特殊拍(撥音、促音)のない方が知覚しやすいことが分かった。

中国の方言による知覚の差異に関しては、語中有声破裂音の場合、母方言の影響で、上海方言話者の方が習得が早く、北方方言話者の方が習得が遅れていることが分かった。しかし、語中無声破裂音の場合、両方言話者の知覚の差異が見られず、無声子音/k/を除

いて、習得が困難であることが分かった。おそらく日本語の語中無声破裂音の呼気が弱く、母語(中国語)の無気音と混同してしまったためではないかと考えられる。したがって、教育現場で、中国語の代用による教授法が結局うまく行かないことが多いだろうと思われる。むしろ初級段階においては、両方の方言話者に対し、中国語の無気子音と日本語の有声子音の違いをきちんと導入し、認識させるべきであろう。

以上から、中国人日本語学習者にとって、習得が難しいとされる有声・無声破裂音の中でも、知覚しやすい音声環境が存在することが分かった。教育現場で日本語の有声・無声破裂音を指導する際、教師はその知覚の順序を念頭において、聞きやすい方から聞きにくい方へと進むべきであろう。

本研究では子音種による有声・無声破裂音の知覚の差異が見られたが、刺激音の音響的特性の分析が必要である。このことについては次回の発表に譲りたい。また、本研究では、知覚を中心に調査してみたが、生成面ではどのような特徴があるのか、そして知覚と生成の関連性などを今後の課題にしたい。

参考文献

- 袁家焯(2001)『漢語方言概要』語文出版社
- 王伸子(1999)「中国語母語話者の日本語音声習得を助ける中国語方言」『音声学会会報』第222号 pp. 36-42
- 蔡茂豊(1979)『中国人に対する日本語の教育の理論と実践—音声教育篇』東呉大学日本文化研究所
- 朱春躍(1994)「中国語の有気・無気子音と日本語の有声・無声子音の生理的・音響的・知覚的特徴と教育」『音声学会会報』第205号 pp. 34-62
- 杉藤美代子・神田靖子(1987)「日本語と中国語話者の発話による日本語の無声及び有声破裂音の音響的特徴」『大阪樟蔭女子大学論集』第24号 pp. 67-89
- 戸田貴子(2001)「日本語音声習得研究の展望」『第二言語としての日本語の習得研究』第4号凡人社 pp. 150-169
- 福岡昌子(1995)「北京語・上海語を母語とする日本語学習者の有声・無声破裂音の横断的及び縦断的習得研究」『日本語教育』第87号 pp. 40-53
- 水谷修(1974)「音声教育の問題点(1)—有気音・無気音の対立を持つ言語の使用者に対して日本語の有声音・無声音の識別・発音能力を与えるためのこころみ」『日本語教育研究』10号 pp. 1-5
- 山本富美子(1999)「中国人日本語学習者の有声・無声破裂音の弁別能力について—北京語・上海語話者に対する聴取テストの誤聴比較分析より—」『平成11年度第13回日本音声学会全国大会予稿集』 pp. 179-184